アドルノとベンヤミン（一）

友情？

三原弟平

アドルノの思想は、彼自身が述べているようにさまざまな「不可能性」[1]につきまとわれており、同じことを繰り返し聞かされるばかりで、われわれの渇きは永久に癒されないかんじだし、相手を批判するさいの口さがなさには真底辟易する思いである。そんなアドルノを読んでいると罠に落ち込むような気がして、なんとかこの罠を脱出したいと思ったりもするが、それでもアドルノを読むことから手を切れずにいるのはどうしたわけか。

たしかに、アドルノという人の戦略は相当に誤解されやすいのではないかとは思う。同じところをぐるぐる回るばかりで決して核心に踏み込まないのは、最近の思想家たちのなかにあっては、アドルノがだれよりも厳しくあの〈偶像禁止〉の戒めを守っているからだろう。うかつに希望やユートピアを語るようなことは決してしないのだ。カフカにことよせてアドルノは、「世界の深い裂目を地獄として浮かび上がらせる光は、最良（オプティマール）のところから出てきた光なのだ」[2]と述べる。すなわち、われわれは地獄のようなこの世の断裂面を浮かび上がらせることしかしてはならない。しかし、浮かび上がらせる光は最良のところから射してきているのだ。この力学になじめ

ない人はアドルノとは無縁な人であろう。

つまり、アドルノを読むことから手を切れない理由の一つは、たとえば、この時代の悪逆さを「絶対的物象化の時代」[3]として規定するその言い方に、他のどの思想家の言説より自分の気持ちに近いものを感じると同時に、今述べた意味でぼくが同感するからであろう。でもその一方では、クシェネクのアドルノを批判する気持ちもよくわかるのである。

> ひょっとしたらあなたの批判はいくつかの点で、必要以上に少々鋭すぎるのかも知れません。というのも、あなたの論証の幾つかは、反動的で芸術的センスのない連中の考えるのとは、もちろんまったく違った意味があり、そういった連中とは比較にならないくらいに深い源泉から汲みとられたものではありますが、彼らの浅はかな異論の立て方と響きのうえでどうも似ているように感じられ、そのことによって歓迎すべき弾薬をその連中に供給してしまいかねないように思われるのです。[4]

これは、一九四九年にチュービンゲンから出されたアドルノの新著『新音楽の哲学』の印象にことよせて、同年一一月一日に出されたクシェネクの手紙のなかの一節だが、そこにはさらに次のような言葉もある。

> ときおりわたしには、あなたが今日の状況の破局（カタストロフ）的な面、出口のない面を誇張しすぎているように思えます。ですが、わたしが誇張だといっているのはあなたの分析にではありません〔……〕。それよりも語り

口が、われわれはあらゆる時代を通じて最もひどい時代に生きているのだ、それどころか、ひょっとするとわれわれは世界の没落に行き合わせる栄誉をになっているかもしれないということに、怒りくるった喜びでも感じているみたいな響きを帯びているのです。[5]

「怒りくるった喜びでも感じているみたいな響きを帯びている」とクシェネクが感じたアドルノの語り口（トーン）は一生治らず、この後も二十年間にわたってせっせと敵に弾薬を供給しつづけていったわけなのだが、しかし、クシェネクも認めているように、語られている内容が間違っているというのではない。むしろ、アドルノが気やすめをまじえずに口にした「破局」性や「出口喪失」性は、残念なことにアドルノの真意（？）を裏切って、なおいっそうその真実味を増してきているように思う。

アドルノを読むことをやめられない第二の理由は、タコツボに落ち込みたくないという思いがぼくにあるからだろう。すなわち、アドルノが批評の対象として取り上げる多様なものは、それなりに自分の関心領域と重なっており、そうしたアドルノの批評を追っていくことは、狭い専門分野に自分を閉塞させることからぼくを逃れさせてくれる。

しかし、そんなアドルノの批評が、扱っている対象の新しい面を浮かび上がらせるということはまれで、アドルノの批評を読んでも扱っている相手のことがわかるというより、つねに相手によってアドルノのことがわかるというかたちにあり、それがまたアドルノの書いたものにたいするイライラを回帰させるわけであるが、しかし、これについてもアドルノには少々の言い分はあろう。

アドルノはよく「構成（作曲）しつくす」（auskomponieren）という言葉を使う。ベンヤミンのように「静止の弁証法」によって論述を止めてしまうことをせずに作曲しつくし展開しつくすなら、そこにはおのずとアドルノの主観がすり込まれていってしまうのは当然なのであって、対象の真をとどめるために論述を止めるということはしない人なのであり、吉とでているか凶とでているかは別として、ここでもまたアドルノは己れの戦略に縛られているのだ。

アドルノを読むことの第三の、最後の理由を考えるなら、今その名を出したベンヤミンとの関係である。アドルノが一生にわたってベンヤミンに倣おう、ベンヤミンを継受しようとしたことは、そのテクストのそこかしこに歴然と現われているが、アドルノがベンヤミンをどう使ったかを見ることは、ぼくにとってはきわめて意味がある。その発想の豊かさに疑いはないけれど、謎めいたままに終わりかねないベンヤミンの秘教的テクストが、アドルノによって今の使用に可能なかたちに顕教化されている、そんなところが確かにあるからだ。

すなわち、アドルノという人の問題は、ぼくにはベンヤミンの使用者、もっというならベンヤミンのエピゴーネンとして見えてくるのである。ギリシャ語で〈Nachgeborener〉を意味するこの言葉には、後進、後継者、模倣者、追従者、弟子、亜流などの意味があるが、ベンヤミンより一一年遅れて生まれたアドルノは、まさにギリシャ語の原義そのままの、ベンヤミンの「後に生まれた者」であったが、ベンヤミンとの関係だけにとどまらず、およそこの世に対する己れの基本的姿勢として、アドルノにはエピゴーネンの自覚があったのではないかと思う。そしてこの自覚が、たとえば、自ら創造するのではなく、すでに他人によって創られた作品にかかわるエッセイという形式にベンヤミン以上に肩入れし、さらにそれを方法論化する結果にもなったのではないか。

ところでエピゴーネンということには二つの問題が孕まれていると思う。その一つは、先行者の域にはどうしても及ばない、いわゆる「亜流」の問題である。が、もう一つ、エピゴーネンゆえの「ラディカリズム」の問題があるようにぼくには思われる。その純粋さ、偏狭さゆえに、師よりもむしろ弟子たちのほうに見られるラディカリズムの問題である。アドルノにも後者の自覚症状はあったのであろう、その著作のいろんなところでこの問題が顔をのぞかせている。

たとえば、一九六一年に発表された「ベケットの『エンドゲーム』理解のために」がある。ここでのアドルノは、ベケットをエピゴーネンのもつ可能性として捉えている。すなわち、弟子が師を越える可能性の一例として、ベケットのことを考えようとしているのだ。ベケットはアドルノにいわせればカフカを継ぐものである。ベケット劇においては「主観」というものが意味を失い、「ヒーロー」というものは取り去られ、「自由」ということでベケットがまだ知っているものは、「取るに足らぬ決心の無力で滑稽な反射作用でしかない」。

この点でもベケットの作品はカフカのロマーンを引き継いでいる。カフカにたいするベケットは、セリーの(seriell)作曲家たちがシェーンベルクに対するのと同じ関係にある。ベケットは自らのうちで再度カフカを反省し、カフカの原理を全体化することでカフカを根底から変えてしまう。年長のカフカにたいするベケットの批判は、今現に生起していること〔＝すなわち劇〕と、対象的に純粋な、叙事的言葉〔＝すなわちロマーン〕のあいだに介在する相違を反駁できないほどに際立たせているが、ベケットのその批判にはまた、自らのうちに敵対するものを含んでいるシェーンベルクの音楽作品にたいし、現在〔＝一九六一年〕のトータル・

セリーの作曲家たち〔＝ブーレーズら〕の関係が有しているのと同じ難しさが含まれている。[6]

つづけて、形式を同じくする裔の者、すなわちエピゴーネンにつきまとう「難しさ」が以下のように語られる。

その形式と同質でないものを顧慮して美的な意味での素材支配の進行にブレーキがかけられる、ということはなしに、同質ではないものへの緊張が抹殺されてしまうに至ったとき、この形式の存在理由とは、はたして何なのか？　この問いを自らのテーマとすることで、ベケットの『エンドゲーム』は窮地を切り抜ける。カフカのロマーンの舞台化を妨げているもの、それが〔劇の〕テーマとなる。[7]

ジードによる『審判』の劇化をはじめ、カフカの長編小説の幾多の舞台化がことごとく失敗したなかにあって、独りベケットだけがカフカのエピゴーネンであることから、むしろ可能性を引き出せているのは、エピゴーネンのもつラディカルさとでもいうべきものでもって、「カフカのロマーンの舞台化を妨げているもの」を、「ベケットがその劇のテーマとしている」からである。この文章は、言い方としては見事な感じがするが、しかしその内実となると少々疑問符をつけざるをえない。よく考えるなら、ベケットは、カフカのロマーンから表現媒体を劇にかえることによって、カフカのエピゴーネン性を超えているのである。ならば、このことをシェーンベルクとトータルセリーの作曲家たちの関係になぞらえて語るのには少々無理がある。また、より哲学がかっているという違いはあるにしても、批評、ないしエッセイという点でジャンルを同じくしたベンヤミンとアドルノのあいだの関

係になぞらえることにも無理があろう。つまりここでは、エピゴーネンが、形式を同じにしながらその難しさを超える道は、語られてはいないのである。

一九四二年に発表された「ゲオルゲとホーフマンスタール」にあっては、エピゴーネンの問題はもっと不毛なかたちで描かれている。ゲオルゲ・クライスのいかがわしさについてアドルノは次のように述べる。

> 詩文学の問題が技法の問題に移されていけばいくほど、排他的なサークルが形成されやすくなる。〔……〕『芸術草紙』への一致協力において示されているようなサークルを結成することを、ゲオルゲにとって正当化するものは、〔弟子たちに〕隠された内容に参与させるということでも、個々の成員を涵養するということでも決してなく、それは技法を管理することなのだ。〔……〕しかし、秘蹟的に伝承された秘法（アルカヌム）としての技法、そうしたものは、必然的に技法的な能力不足へと引っくり返らないかどうか、形式主義についておしゃべりするときに卑俗な批評家たちの目に浮かんでいる、ああした型（ルーティーン）にはまったものへと、それが引っくり返らないかどうかという問題は、未解決のままである。
>
> 秘密が空しいものになればなるほど、その秘密を守るものには、それだけポーズが必要となる。ポーズこそは技法のほかにゲオルゲが自分の弟子たちに奨めるすべを知っていた、その当のものである。[8]

もちろんアドルノとベンヤミンの関係は、カフカとベケットのそれ以上に、ここに書かれているようなゲオルゲとそのクライスの成員たちとの関係とは遠いものであった。（それでも、アドルノがシェーンベルク派の作曲家で

あることを断念した背景には、ここに描かれているようなエピゴーネン性への絶望が、もしかしたらアドルノにもあったのではないかとは思われるのだ。）

先走ってエピゴーネンという言葉を出したために、どうも話が袋小路に落ち入ってしまったようだ。というのも、アドルノとベンヤミンの関係は、師と弟子の関係よりも、何よりもまず友人同士の関係だったのだから。しかしこの〈友情〉ということでは、アドルノには（そしてベンヤミンにもまた）、ぼくらには少し異様に思える〈友情〉観があったように思われる。そうしたアドルノとベンヤミンのあいだに交わされた、「現存するすべての書簡一二一通を初集成」した往復書簡集の邦訳が、晶文社から一九九六年に出された。それには、「共同で哲学する運命を生きた二人の卓越した思想家の比類ない知の対話」という帯が巻かれている。しかしこのようなステレオタイプな物言いは、彼ら二人の関係にはふさわしくないように思う。とにかくアドルノという人は、『ミニマ・モラリア』のなかで[9]、ニーチェの『悦ばしき知識』から次のような「調停者たちに抗する」という省察を引用する人なのだ。

二人の断固とした思想家を媒介しようというのは凡庸人の証拠である。そうした人は一回かぎりのものを見る眼を持たない。何を見ても同じに見えたり、似たり寄ったりに見えたりするのは、弱い眼にみられる特徴だ。[10]

ニーチェのこの言葉はアドルノとベンヤミンのことを考えてゆこうとするぼくらにとって、つねに自戒とすべき言葉だろう。「膠でくっつけられた友情よりは、正真正銘の敵対をこそ！」[11]というニーチェに連なろうとするところが、たしかにアドルノにはある。しかし、ニーチェは友情を否定する者ではない。同じ『悦ばしき知識』の「すべて愛と呼ばれるもの」について述べられた断章の最後で、彼はまた次のように語るのである。

――だが、たしかに時おり地上にも次のような愛の継承がある、つまりそこにおいてはふたりの人間のあの互いに所有し合いたいという要求が、ある新しい熱望と所有欲に、すなわち、彼らを超えてかなたにある理想へと向けられた一つの共同の高次の渇望に道をゆずる、といった種類の愛の継承である。だが今誰がこの愛を知っているのだろう？　誰がこの愛を体験しただろう？　この愛の本当の名は友情である。[12]

このように、並はずれて孤独であったニーチェは、じつは、近代にあって、「友情」の成否の可能性を古代と対比させながら誰よりも考えつづけ、かつまた、友情の必要性を誰よりも深刻に感じていた人なのだ。『曙光』には次のような省察もある。

古代は友情というものを深く強く生きつくし、考えつくして、それをほとんど自分と一緒に墓に埋葬してしまった。これは古代のわれわれにたいする優位である。それにたいしわれわれには、示すべき理想化された性愛がある。古代人の偉大な有能さのすべては、男のかたわらにならぶものは男であること、女には、男の

愛における最も親密なもの、最も高いもの、いやそれどころか、ただ一つのもの――そう感じるのは情熱が教えるところだが――を、要求することは許されないのだということのなかに、その支えを持っていたのだ。もしかすると、まとわりつく木蔦や葡萄の蔓ために、われわれの樹はあまり高く伸びないのかもしれない。[13]

少し異様に思えるくらいにフェミニズムへの傾斜をもつアドルノは、ニーチェのこのような女性観には決して同意しないだろうが、友情の成立が近代においてはますます困難になったというニーチェの指摘には同意するだろう。というのもアドルノは、ポル・ボウで自殺したベンヤミンに捧げた先ほどのエッセイ「ゲオルゲとホーフマンスタール」のなかで、「すでに当時（＝世紀転換期）、異常なほど創作力に恵まれた者たちのあいだでの友情が如何に成立しがたかったか」について、次のように書いているからである。アドルノのこのエッセイは、ゲオルゲとホーフマンスタールのあいだの血腥い交友関係を、一九三八年に出版された彼らの『往復書簡』に寄り添うかたちで描き切ったものだが、

両者の友情は、それが現実のものになる前にすでに潰えている。当時すでに友情は、きわめて異常なほど創作力に恵まれた人々のあいだにおいてさえ、たんにシンパシーや趣味の一致からだけでそれが可能となるというようなものではなく、ただ、拘束力を持った両者共同の認識にのみ基づくものであり、理論がその実践的要素として含んでいるところの、連帯感による友情しかありえなかった。往復書簡のなかでは、友情の前提になるものを互いに認識し合うことは、胸苦しい思いで避けられている。[14]

近代においては、たんに虫が好くとか、どういうわけか気が合うとかいったようなことでは友情は成立しなくなっているとアドルノはいう。友情の成立には「拘束力を持った両者共同の認識」が必要だというこのアドルノの言い方で意味されているのは、著作者として両者のめざす目標が一致しているとともに、そのやり方、すなわち手段にかんしても、両者共通の認識にあるということなのだろう。そしてじつはこれこそが、アドルノとベンヤミンの友情において、のっぴきならない事態をもたらしてしまうのだ。とにかくアドルノの場合、すでにどんなに篤い友情が成立していても、相手がこの「共同の認識」から少しでも踏み外すことがあれば、すぐさまその友情も撤回されるという厳しさを持つものであった。その格好の例となっているのが、亡命中の一九三七年にアドルノがクラカウアーに見せた態度である。

アドルノとクラカウアーの友人関係は、第一次大戦末期の一九一八年にまでさかのぼる。ときにクラカウアー二九歳、アドルノにいたってはいまだ一五歳のギュムナジウムの生徒であり、アドルノが精神的に成長するにあたってクラカウアーからえた影響にはまことに深甚なものがあった。その証拠に、一九三三年には処女作ともいうべき教授資格申請論文『キルケゴール――美的なものの構成』を、「わが友ジークフリート・クラカウアーに」という文言を刷り込んで捧げるほどの友情で両者は結ばれていたのだ。その友クラカウアーが「共同の認識」を失ったがゆえに関係を絶つと息まく手紙を、アドルノはオックスフォードから一九三七年五月四日、パリのベンヤミン（ちなみに、このベンヤミンとアドルノとの交友は一九二三年から始まっていた）に宛てて出している。

アドルノにしてみれば、すべての原因は、ひとえにこの時クラカウアーの書いた『オッフェンバック』という草稿のひどさにある。これは「自分の最悪の期待をもはるかに超えるものだった」[15]という。「それらの文章たるや、著者のほうは赤面している様子がないだけに、ますます読者を真から赤面させるもの」だし、「音楽を扱っている僅かな箇所は、ぞんざいな間違いだらけ」。「その社会的考察なるものは、小母さんたちの四方山話であるし、愚にもつかないその低俗さは、目をパチパチさせて社交界へ、さらには青楼（ドゥミ・モンド）の巷に驚嘆と羨望のまなざしを向ける小市民のなかにのみ、それと等価のものを見いだせるといったたぐいのもの」[16]であると。

クラカウアーが本当にこの本に身を入れているのならば、彼はもう、真剣に相手にすべき人々のメンバー表から自分で自分の名を決定的に削ってしまったのです。ですから私は、彼との関係を絶つべきではないかと、真面目に考えています。なぜなら関係を継続するとしたら、かえって彼を一層侮辱することになるでしょう。彼が何をしようとも、こちらの心に触れてくるものはなにもない、ということになるでしょうから。ともあれ、なんとかしなくてはなりません。私は手紙を書きかけましたが、中止しました。私としては今、あなたとエルンスト〔・ブロッホ〕と私とが共同行動を取ることを考えています。そうすれば、もしかして彼も考え直すかも知れませんから。それとも、この件は私がパリに行くときまで待つべきでしょうか？[17]

一四歳年長の友人にたいし、これはまた何と厳しい批評であることか。さらに恐ろしいことに、アドルノはクラカウアーにたいし、まるでオストラキスモスのように皆して共同行動を取ろうと提案しているのだ。アドルノの

この手紙は、「とにかくお願いしますが、早急にあなたのご意見を聞かせてください」[18]という言葉で結ばれている。

これにたいし、パリのベナール街から出されたベンヤミンの手紙を見ると、さすがに大人というか、アドルノより一一歳年長のゆえもあってか、はるかに冷静であり、また手紙の後半に記されたその『オッフェンバック』評を見れば、批評家としてもアドルノよりよほど具体的、かつ、的確であることがわかる。

ベンヤミンは、「ぼくは、ひとつの反問で応ずるほかはなさそうだ」という。「きみは、どうしたらよかろうか、と問うている。――それにたいして、ぼくは答えよう、何かをするべきなのだろうか、と」[19]。

この、みずから再提出した問いに自答するさいに見せるベンヤミンの考え方は、ぼくにはまことに興味深い。ベンヤミンはこう考えるのだ。もし、クラカウアーと自分の関係が、ほかに誰とも関わりを持たぬ二人だけの「密閉された」関係であったのなら、自分はただちに、「何もすべきではない」という答えを出しただろう。なぜなら、クラカウアーの『オッフェンバック』は、亡命生活の苦しさのなかで、仕方なくなされた「あきらめ」の産物なのだから。かつてのフランクフルト新聞の文芸欄担当記者で、亡命しても自分やアドルノのように「社会研究所」との結びつきのない彼が、市場での多少の成功が見込めるエミール・ルートヴィッヒやルートヴィッヒ・マルクーゼ流の伝記作家に身を落としたとしても、誰にそれが責められよう。ただ、これを書くときのクラカウアーには、いくばくかのシニズムがほしかったところだ。なぜなら、今もフランクフルト新聞の文芸欄担当者をやっていたなら、彼こそはこうした本にたいする最も厳しい批評者の一人であったろうから。[20]

ベンヤミンはさらに言葉を継ぐ。ところがクラカウアーと自分との関係は、そうした密閉・隔絶されたプライベートな関係ではない。以下、アドルノほどではないにしても、やはり特異なベンヤミンの〈友情〉観が披瀝さ

れる。

クラカウアーとともにいるのは、ぼくだけではない――しかも、ことは個人的な布置図（コンフィギュラツィオーン）にかかわるだけでなく、ザッハリッヒな布置図にもかかわることなのだ。つまり、クラカウアーが放棄した陣地は、彼だけが占拠していたわけではない、ぼくたち共同の陣地だったのだ。事態の深刻さはこの点にある。[21]

ベンヤミンだけでなくアドルノにとっても、その思考表現のうえで鍵（キー）となるような「布置」の概念を、ここでベンヤミンが人と人との関係においても使っていることは注目に値する。（ちなみに、ベンヤミンが「布置」を言うことの意味は、日本語で書かれるベンヤミン論を見ると、十分には理解されていないように思われる。さすがにアドルノはその重大さに気づいているだけでなく、自らの叙述にもそれを生かそうとしている。）

ともかく、友情を絶つべきだというアドルノの提案に、ベンヤミンが頭から反対できないのは、このような〈友情〉観がやはり著作家としてのベンヤミンにもあったからである。そしてこれに似た考え方を、ベンヤミンは手紙のなかだけではなく、同時期の著作「ヨッホマン論」においても示している。手紙と同じ一九三七年に、ベンヤミンが忘却の淵から救い出したカール・グスタフ・ヨッホマンとは、ドイツ市民革命の先駆的な戦士であり、ラトヴィア出身の亡命著作家であった人物だが、このエッセイの冒頭で、ベンヤミンはヨッホマンを中心に、その精神と近親性のある文学者たちに、一つの架空の密集方陣を組ませる。そうすることでベンヤミンは、ありうべ

き架空の友情の布置図（コンフィギュラツィオーン）を描こうとしているのだ。

この場合の友情は、土地の縁にこそ縛られているが、しかし、時間を超えて結ばれており、まずその方陣の一角を占めるのは、ベンヤミンに言わせるなら、フランス在住のドイツ人亡命者としてヨッホマンより一世代ほど先輩にあたるG・フォルスターである。さらに、ラトヴィアの農奴解放の先駆けとなる本を書いたが、ゲーテについてのその退屈な批評ではドイツ文学史に汚名を残すことになったG・メルケル、また同じバルト人としては、シュトルム・ウント・ドラングの頂点に立つ精神のひとりであったレンツ、さらにバルト人としてもうひとり、これらの豪胆な人々のなかでもとりわけ兵士的なゾイメの顔がこの方陣には居並んでいるだろうという。[22]

一八世紀の終わりから一九世紀の初めにかけて幽冥なドイツの時空に虹のように架かっていた、このような方陣のイメージで、じつはベンヤミンは、自分とアドルノ、ブロッホ、クラカウアー、さらには、ブレヒト、ショーレム、カフカたちのことを考えていたのである。だからこそ、クラカウアーが、この方陣の一角から脱落するということは、ベンヤミンにとっては黙視しがたい、まさに「深刻な事態」だったのだ。

このようなベンヤミンやアドルノの〈友情〉観に触れると、とにかくぼくらにはベンヤミンだけ、アドルノだけの個別研究では事はすまされないということが、あらためてわかってくる。彼ら自身にも、精神的な方陣を組んで、星雲状の思考を行なっているという自覚があったのであり、この意味では、あの「共同で哲学する運命を生きた」という晶文社の本の帯にみられた言い方も、たしかに正当性を持っているのである。

ベンヤミンはこうした星雲状の思考、ないし著作活動のことを、ヨッホマンを語るさいに表明したが、アドルノのほうはヘーゲルを語ることにおいて表明している。以下の引用は一九五八年一〇月二五日、フランクフルト

におけるドイツ・ヘーゲル協会総会での記念講演「ヘーゲル哲学の経験内容」のなかの一節だが（ちなみにこの講演は、同年一一月二五日にソルボンヌでフランス語によっても行なわれたようだ）、

じっさい、フィヒテの『知識学』からヘーゲルの死にいたるまで数十年間のドイツ観念論は、厳密に個人化された運動というより、むしろ集団的な運動だった。つまりそれは、ヘーゲルの用語によるところの「思想のエーテル」だったのだ。この思想は、排他的に、あれ、ないし、これというかたちで体系に結びついていたわけではなく、またつねに特定の個人によってすっかり明解に言葉にされたわけのものでもなかった。シェリングとヘーゲルが決裂した後でさえ、この二人が書くもの―かたや『世代』、こなた『現象学』―のなかには、似たような表現や全体として同じ思想傾向が見いだされ、その著者を識別することは、かならずしも彼らの青年時代とくらべ容易というわけではない。[23]

「決裂後の類似」というこのあり方は、まことに興味深いが、ここでのアドルノはさらに、当時の星雲状に思考する者たち見られた微妙な消息を、次のように伝えている。

〔フィヒテから、シェリング、ヘーゲルへいたるあの世代の〕著作者たちは、後世の哲学者たちのように、固定した概念を操らなかった。後世の哲学者たちは科学をお手本に選んだが、ドイツ観念論の世代は、まさにこの科学に抵抗したのである。そこでは、個々の表現が必ずしも完全に透明にならなくても、集団的了解の

雰囲気（Klima）によって、ひとは自分が言いたいことをまだ伝えることができた。あるいはこうした雰囲気そのものが、明確な表現を心がけることを直接阻止して、明確な表現は、かえって人々が一致して感じているものを損なうと考えさせていたとも言えよう。というのは、明確な表現は、この一致をことさら表面に押し出してしまうからである。[24]

このようなことがアドルノやベンヤミンたちのあいだにもあったのかどうかは別にして、これはじつに興味深い事態である。この論のはじめにアドルノから手を切れない理由を三つばかりあげたが、単独の思想家による「固定した概念」よりも、ここに描かれている集団による「星雲的思考」のほうを見ていくつもりなら、とりあえずアドルノを追っていくことが、もっとも恵むものは豊かであろう。というのも彼はこの方陣のなかにあってもっとも長く生きたわけであり、この集団的思考に最後のけじめをつける気持ちが、おそらくあったろうと思われるからだ。

二人に特異な〈友情〉観があったというところから、ついつい話が先走りすぎてしまった。ここらでまた一九三七年のクラカウアーとのことに戻ろう。

ベンヤミンからの返事を受け取ったアドルノが、五月一三日に再度ベンヤミンに出した手紙には、クラカウアーに宛ててアドルノが書いた手紙のコピーが同封されていたらしい。勿論その内容は今回の無思慮なクラカウアーの愚行を難じるものであるのだが、アドルノとしては、「彼の本を黙視したり敬遠したりすることは、彼を放棄す

ることになるでしょう」[25]という思いから出たもので、彼なりの筋は通っているのだ。（当初、ぼくは当然これは実際に出されたものと思っていたが、しかしこの手紙の投函については一抹の疑念も残る。）

けれど、五月一七日に出されたベンヤミンのさらなる返書を見ると、アドルノがこの手紙を実際に投函したとベンヤミンは受け取っているようである。そして、「きみが述べた『オッフェンバック』についての判断へのぼくの同意以上のものを、すなわち、きみがその判断をクラカウアーに伝えた態度への、ぼくの協力を知らせておきたい」と、手紙送付というアドルノの行為への一応の同意を表明している。が、それにつづけて、「いうまでもなく、ぼくならば決して、似たような行動を試みはしなかったろう。思うに、きみだからこそあの行動は可能だったのだし、そしてそのことによって、ぼくのクラカウアーにたいする姿勢も、ぼくが望みえた以上にはっきりと主張できるものになったわけだ」[26]という文章には、アドルノの性格をすでにしてよく知っているベンヤミンの、アドルノへの若干の批判も含まれているように感じられるのだ。

実際にこの手紙がクラカウアーの手に渡ったかどうかは別に、ともかくこのような手紙がアドルノとベンヤミンのあいだに交わされていたことなどクラカウアーはつゆ知らない。これらのアドルノの手紙で見るとおり、たしかにその友情関係は亡命中に微妙に変質していったのだろうが、アドルノとクラカウアーは一九六〇年にいたるまで表面上は一応平穏な交友関係を続けていた。しかし、この両者のあいだで一九六〇年八月一二日に激烈な衝突が生じたさい、クラカウアーがアドルノの立場を非難するにあたって持ち出すのは、すでに死んで二十年にもなるベンヤミンその人の立場だったのだ。

一方、一九三七年のベンヤミンにとっても、こうしたアドルノのクラカウアーへの矯激な反応を、対岸の火事

といってすましておくことはできなかったはずだ。クラカウアーの『オッフェンバック』にたいして見せたアドルノの年少者ゆえのこうした旋風（つむじかぜ）のごときラディカリズムが、二年後には「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」を書く自分に襲いかかることになるのをベンヤミンとしては予期しえたであろうか。この場合は、ベンヤミンの論文がひどいというのではなく、方法論が違うところからなされた批判であり、しかし、それだけにいっそうのっぴきならない対立となる。つくづくぼくは思うのだ、年若い友としてアドルノをもつことの戦慄と不幸を。クラカウアーの、そしてベンヤミンの。げに恐ろしきは、どこまでも追ってくるエピゴーネンのラディカリズムである。

アドルノとベンヤミンの友情観については少し触れたわけだが、ここで、クラカウアー自身の友情観についても見ておくべきだろう。前二者のそれが友情観というには気恥ずかしいような片言隻句でしかなかったのにたいし、クラカウアーのほうは友情についてはるかに秩序だった大部なものを書き残している。

このクラカウアーは二つの友情論を書いているのだ。その前編は「友情について」というタイトルで『ロゴス』（第Ⅶ巻、一九一七／一八　第二冊）という哲学雑誌に発表されている。おそらく一九一七年ごろに書かれたものだろう。当時クラカウアーは二八歳、この翌年に一五歳のアドルノと出会うことになる。後編のほうは一九二一年『ラビ・ノーベル博士への贈り物』のなかで初めて発表されており、もちろんこのときには、すでにアドルノとクラカウアーは親密な友人関係に入っている。この二つの友情論は、ぼくとしては二つの意味で見逃しがたい。アドルノとベンヤミンの関係を見てゆく上で、友情ということの意味を考え直してみたいし、ぼく自身五十年以

上も生きてきたはてに、人間と人間の関係での準拠枠があやふやになっているきらいもあって、凡庸すぎてうんざりするところもあるが、あえてクラカウアーのえがいている友情論を、ここで自由にパラフレーズしながら見ていこうと思う。

一六世紀後半から一七世紀初めというやはり激動の時代を生きたフランシス・ベーコンの場合は、それでもなお「真の友人が無ければ、この世は荒野にすぎない」とも、「友人が無ければ舞台を去ってもさしつかえない」とも『エッセーズ』に書けたわけだが、人と人とがますます関係を取り結びにくくなっている二〇世紀前半、いや、友情をいうより、人は人にとって狼であるという言い方のほうがはるかに肯綮に当たっているように思われる第一次世界大戦のさなかに、二八歳といういまだ成熟しきったとはいいがたい年齢のクラカウアーが、学校では教えられることのない人生の秘儀めいた知を、自己の思考と経験のかぎりをかたむけ、まさに万華鏡的に繰り広げてみたことの背景を慮るに、おそらくは、人との結びつきに難渋していたがゆえに、人との交友がどうもスムーズに行かず、傷にまみれて生きてきた経験があるがゆえに、自己への指南書としてこのような友情論を書いてしまったのではないかと思われる。

この前編は哲学雑誌に載ったわけであるが、冒頭二ページの「反哲学」としか言いようのない前書きからもわかるとおり、このエッセイではむしろ社会学的、心理学的な考察法がとられている。そして、ここでの彼のそうした考察法のさらなる特徴は、直接〈友情〉Freundschaftというユートピア的な高峰にとりつくまえに、そのまわりにひろがる広大な三つの裾野をまず経巡ろうとした、その迂回的な姿勢にある。その三つの広大な裾野とは、〈仲間関係〉Kameradschaft、〈同僚、ないし、専門仲間関係〉Fachgenossenschaft、〈知り合い、ないし、顔見知

りの関係〉Bekanntschaftなのであるが、そのなかでまず〈Kameradschaft〉について。

この関係が生じるには特別の精神的親和性も、内的な惹かれ合いも必要ではないという。〈仲間〉の意識は人が共同で何か事にあたるときには、どこでも生じてくる。この関係の核になっているものは、外から据えられた一つの共通の目標である。遊び仲間、通学仲間、旅仲間、何でもいい肉体労働をするときの仲間、戦仲間……。その目標が危険をともなうものであればあるほど、この意識は強くなる。今列挙した最後のものには、日本語でも戦友というふうに、すでに〈友〉の名が与えられている。いつもは口をつぐんでいる事がらも、生死を共にするこうした仲間にはつい口をすべらせてしまうというのもよくあることだ。そうすることで心の負担を軽くしようとするわけだが、しかしこの関係はそんなに高級なものではない。おそらくここで、人は、友の状態ではないのに、それと錯覚してしまうのだろう。この関係、ないし、この意識は、ひとつの目標を前にしての平等、対等さがその本質なのであって、決してそれ以上のものではない。目的を追求してゆくさいに妨げとなるようなその人間の個性や特殊性は、この関係のもとでは除去され、摩滅されていく。クラカウアーは「夫婦」という関係も、愛などという前に、こうした〈Kameradschaft〉、すなわち〈戦友〉という意識でささえられている場合が多いことを書き加えている。永遠にたがいに属しあう彼らは、同一の条件下で生き、苦しみ、戦っていくわけであるのだから。

この関係にあって徳とされるのは、難局を克服するにあたっての堅忍不抜さであり、犠牲心、勇気である。不徳とされるのは、あらゆる種類の偏屈さ、なんらかの個性をこの関係のなかにまじえたがること、怠惰さ、すぐにいらつく不機嫌さなどであるという。なるほど、〈仲間〉などといって持てはやしはするが、その本質はそんな

ものなのかもしれない。

つづいて〈Fachgenossenschaft〉について。〈Fachgenossen〉同士は、自分たちのことを〈仲間〉とは呼ばず、〈同僚〉Kollegenという。このように、このエッセイで目立つのは、ドイツ語の言葉遣いを手がかりとすることで、なんとか〈友情〉を頂点とする人間の精神的な関係の諸事実を解明しようとする態度である。逆にいえば、ここでクラカウアーによって語られている事がらは、それほどに手がかりの少ない、語りにくいことなのだ。この〈Fachgenossenschaft〉という関係が成立するためには、ある種の専門知識、および、その専門領域内での一定程度の熟練を前提とする。その意味で、この関係を構成し合うのは、一種の選ばれたもの（エリート）たちである。つまり、この関係の核をなしているのは、選んだ職業の一致なのである。クラカウアーはこうした〈Fachgenossenschaft〉の生じやすい職種として、医者、法律家、説教師、商人、熟練労働者、役人などの名をあげている。そうした職業には特有の問題というものが無数にあるゆえに、この関係にあるものたちは、いわゆる〈Fachsimpelei〉、すなわち、「仕事場の外で専門の話をする」などといった段階を超え、もっと高い精神的信頼関係へといたることがある。この関係は友情へ移行することも容易にありうるが、ただしそれには両者のあいだに深い人間的な関与が不可欠で、たんに職業の一致というだけでは、友情が成立不可能であるのはいうまでもない。つまり、この関係にあっても〈Kameradschaft〉と同様、原則的には個人的問題や個人的愛着を語ることは締め出されている。私の夢、私の思い出、私の憧れ、私の愛、そうした世界が始まるとき、この関係は終わる。〈Fachgenossenschaft〉と〈Freundschaft〉は、はっきり国境線が引かれた二つの異なる国なのであり、われわれの中にはその国境侵犯を厳しく見張る警備兵がいると同時に、ここではまた容易に〈Freundschaft〉の国への越境も生じる、というわけで

ある。

クラカウアーのこの友情論が面白いのは、三つ目の〈知人〉、ないし〈顔見知り〉、ないし〈知り合い関係〉とでも訳すべき〈Bekanntschaft〉の関係に大きく注目している点である。この関係の特徴は、その結びつきの源泉を、目的の一致にも職業の一致にも持たず、人間に置くところにある。つまり〈Bekanntschaft〉を生じさせる要因をあげることは不可能であり、この関係が生ずるにあたっては、偶然のしめる割合が大なのだ。すべてがそのきっかけになるとすれば、この関係の根拠は魂(Seele)自身にあるに相違ないという。クラカウアーのこの社会学的考察には、ときおり、このように手垢にまみれ、もはや意味を失っている言葉が、何のてらいも反省もなく混入してくる。こうした態度にアドルノは激しい反感を持つことになるのであろうが、クラカウアーは、さらにここで個性(Persönlichkeit)という概念をも導入してくる。

しかし、この〈知人〉関係を越えて〈友情〉の国にいたるにも、人は目に見えない壁を越えなければならない。その壁の向こうに流れている他人には覗かれたくないものは、〈Bekanntschaft〉の段階では永久に閉ざされたままである。〈知り合い〉というこの関係にあっては、それぞれの関係の具体的なかたちが、おのずと生じてきてしまうのだ。そうなると、おたがいの心の奥の開き合いはもはや生じず、二人の関係は定温状態になってしまう。しかし、それをこそ〈知人〉というわけであろうが。

ところで、上記三つの関係では満ち足りないものたちは、もっと密接に結びつき合える相手を探そうとする。この要求に答えうるものが〈性愛〉geschlechtliche Liebeと〈友情〉Freundschaftだとクラカウアーはいう。この二つは、前記三つの関係とは違って、人間の「魂」の全体を捕らえるものなのだ。けれど〈性愛〉とはいって

も、たんなる肉の愛は自分のこの考察からはオミットするとクラカウアーはいう。さらに結婚、すなわち、婚姻による結びつきも。もし〈友情〉をわきへおし退けるものがあるとすれば、それはただ、〈精神化された官能愛としての性愛〉だけなのだから。

では〈性愛〉と〈友情〉の違い、恋人たちと友人たちの違いはどこにあるのか。恋人たちはつねに一緒にいたがる。生活を分かち合いたがる。そうしたとき彼らの感情は深まり、またそのことで、さらに多くの養分が〈恋愛〉に補給される。それに反し、友人たちは、日常でのすべての時間の接触といった、そういったものは拒むのだ。つまり〈恋愛〉と〈友情〉にあっては「全体性」Ganzheitということについて了解の仕方が違うとクラカウアーはいう。[27]

〈性愛〉との比較は、これからもまたクラカウアーによって適宜行なわれてゆくことになるが、ここではひとまずこれで終わり、いよいよ〈友情〉の考察に入っていく。けれど、クラカウアーは最初三つの方向に迂路を取ったように、今度は〈友情〉を四つに分ける。すなわち、〈青春の時の友情〉、〈大人同士の友情〉、〈年の離れたものたちの友情〉、〈性を異にするものたちの友情〉。これら四つの〈友情〉を同列に語るわけにはいかず、また、これら四つを理解することによって、初めて〈友情〉の本質に近づきうるのだという。が、四つの〈友情〉それぞれの違いについての考察は、この前編では行なわれない。それについては、一九二一年に発表された「友情についての考察」のほうで述べられる。この前編では、あくまで友情の〈生成〉そのものに主題は絞られている。そこで四つの〈友情〉はさておいて、友情〈生成〉の可能性について考えるここでのクラカウアーは、少々安易な気もするが、人間を二つのタイプに分けるのである。

第一のタイプはバラバラの人間。すなわち状況の産物でしかなく、外から受ける印象に吹きさらされるままの、ハイデガーいうところの「世人」のような人間である。今怒ったと思ったらもう笑っている、むらばかりの人間。ならいせ(Gewöhnung)としきたり(Sitte)、および、日々の風向きの具合が要求するままに動くだけの人間。キルケゴールの言葉でいえば「美的段階」にいる人間であろうか。(もちろん『キルケゴール論』でのアドルノは、こんな風にこの段階を片づけはしないが。)こんな人間の内面はまさしく迷路だとクラカウアーはいう。つまり、〈これはおれではない〉といって、何かを自分から捨てることができない人間。いってみれば特性のない人間、個性なき人間である。クラカウアーはこれにたいし、「世界観を持たない人間」という古くさい言い方をしているが[28]、しかし、芸術作品からも人からも、どんどんとアウラが失われていきつつある時代には、当然また個性も失われていき、特性のないあり方こそがわれわれの特徴となっていることは、すでに時代の常識になっている。クラカウアーは、こんな第一のタイプの人間に可能な人間関係は、どれほど行っても〈Bekanntschaft〉の域を越え出ることはないであろうと言うが、ということは、ますます〈友情〉は、成立不可能なものになりつつあるということなのだ。

つづけて第二のタイプ。クラカウアーに言わせれば、「このタイプの人間の意識においては、すべての個々の体験、個々の内実が、関係を持ち合い、織り合わされている[29]」という。つまり内面的に統一された人間のことをいいたいのであろうが、かといってこの意識を、「明快な合理的な意識」と解してはならないという。むしろこの意識は感情に根を下ろしているのであり、本能的意欲や本能的反抗として姿を現わすものであって、それが純粋な思考として現われることはめったにないのだ、と。ここでこの意識を説明するためにだろう、クラカウアーは唐

突に「自我‐意識」Ich-Bewußtseinという概念を導入する。「自我‐意識には、それはクルクルと所を変えるものであるのだが、無力さとしての自我‐意識と、強さとしての自我‐意識がある。無力さとしての自我‐意識は、魂が自らの要求を満たせないとき、ないし、魂がなんらかの種類の障害を克服できないときに形成される」[30]。そうしたとき、魂は捕らえられた獣さながらであって、檻の鉄格子に向かって虚しくぶつかるばかりだ。内なる力が自然な流出を妨げられ、実りのない自己省察が目覚めるのである。

それにたいし強さとしての自我‐意識は、魂が世界のなかでひとつの全体として自分を感じ取り、かつ、それを世界に告げ知らせようとするその魂自体の強力な意志のうちに存する。クラカウアーは前者の自我‐意識を「止められた息」にたとえ、後者の自我‐意識を「ふかぶかとする深呼吸」にたとえる[31]。たしかに息を止めっぱなしでは死ぬばかりであろうが、かといって深呼吸ばかりを続けるわけにもいくまい。それで「クルクルと所を変える」という先の言い方が出てきたのであろうが、以下、第二のタイプの人間を語るにおいては、やはりこの「深呼吸」のほうを強調するかたちでなされていく。

強さとしての「自我‐意識」（以下、たんに「自我‐意識」と呼ぶことにする）はある特定の目標（Ziele）を持たねば、よく展開されえない。とっかかりがなければ空転するばかりだし、核がなければ結晶はせず、虚空に漂うばかりだ。「すべての衝動は、形式を求める」[32]。自我をまるごと全体要求するような目標に出会えるとき、はじめて魂は満ち足りるのである。

自我を発現させるためには目標が必要であるが、さりとて、また、その目標によって奇形化におちいることのない、そのような都合のいいかたちでの強さとしての「自我‐意識」とは、ではあらためて如何なるものなのか。

こう問い直したクラカウアーは、そうした「自我‐意識」は、その中心に目標や好み、しっかりとした意志の方向性などを持つことにより、価値を量る物差し（Wertmaßstäbe）を手に入れているという。[33] この「物差し」にしたがうことで、「自我‐意識」はその本質内容をある関連性をもたせながら分節化できる。重要なものは、そうでないものから容易に分離され、ある特定の特性や体験は核心に引き入れられ、その他のものは表面に追いやられる。こうしてひとつの秩序が生ずるのであるが、その中ではあらゆる動き、あらゆる行為、あらゆる感情がその所をえているという。あらゆる特殊なものや個別的なものにかかわる思考も、この「自我‐意識」のもとにあっては容易に一般的なものへと導かれてゆく。生活感情は、拡散された日常生活から離脱し、偶然的な気まぐれに左右されなくなり、それと認識された自らの自我の基礎へ、つねに引きもどされる。

――こう読んでくると、たしかにクラカウアーのこれはポストモダン以前の人間観という感を強くする。アドルノにはこうしたナイーブさは耐えがたかっただろうと思われるが、クラカウアーは、このような内面を持った人間を、共鳴板をもったヴァイオリンに譬え、「響きの豊かな本質を持った人間は、どんなにつまらない体験であってもこれを聖化することができる。もろくもわきへそれてゆくかわりに、そうした体験も、そのような人間ならば震わせ、しまいにはその魂全体が共鳴して音を発するようになる」[34]といってみたり、「そのような人間は、覗き込めば込むほどさまざまな色が浮かびあがってくる月長石みたいである」[35]というふうな言い方をする。「我々はこのような第二のタイプの人間を個性と呼ぶのであり、ただこうした第二のタイプの人間だけが真に友人というものになれるのだ」[36]。

ここでまた、先ほど少し触れられた〈性愛〉と〈友情〉の違いが、再度考察される。〈性愛〉とは、魂が性の衝

動とアマルガムをなしつつ、おたがいの生をまるごと溶け合わすことを目ざす愛の要求であるが、〈友情〉の本義は個性と個性が協和音を奏でるところにある。が、現実においては、〈性愛〉と〈友情〉のこの二つの国は部分的に重なりあっている。〈友情〉というものが同伴していない真実の〈愛〉などというものはないであろうし、〈愛〉を欠いた真の〈友情〉というものもまたないだろう。ここで一般論を述べるなら、すべての感情は、その展開に欠くことのできないところの他の感情、ないし他の特性を必要とする。そして、内なる力は、まさにそれが現実のものとなろうとするところにその本質はあるのである。が、〈愛〉が欠けているところには、いかに魂と魂のあいだに接触点が多かろうと〈友情〉は生じないのだ。

以上で友情の〈生成〉が可能となる諸条件の考察を終わって、いよいよ〈友情〉という関係自体の考察に、すなわち、〈個性〉として自分を意識したふたりの人間による自己発見の本質とは何なのかの考察に入ってゆく。

クラカウアーはまず、すべての人間にはその性格をかたちづくる素質の一定の混合ぶり、すなわち、同じままにとどまる気質、つねに再帰する感じ方といったようなものがあって、それはかなり不変のものだといっていい、という。このフレーム(Gerippe)を心棒に、そこに、世界の多様性からその者が受けた印象、すでに幼年時代からその人間の本質を形づくることとなった克服しがたい経験、消えないイメージ、深くその内面に食い入っている思想などが肉づけされており、そうしたものがそれぞれの人間の基底層〈Grundschicht〉をなしているのだという。とにもかくにもここでのクラカウアーは、内面的な「基盤」Fundament、ないし「根の層」Wurzelschicht といったものを仮定したいわけで、この〈根の層〉はその人間の本質を〈芽〉のかたちで含み持っているのであり、時いたって展開していくのをそれは待っているのだ、という。(37)

ところが、ある種の認識領域においては、このような魂の基底層の存在など必要としない、そんな領域があるというのである。それは純粋な論理的思考と、一面的なせまく限られた想像力（ファンタジー）で事たりる領域、すなわち精密科学の領域である。というのも、これらは、一応誰であっても同じように理解しうるということが前提とされた領域だからだ。ところが先ほどの「内奥の非合理的な基底層」[38]を含めて、その人間の魂のすべてを要求する認識領域がある。そうした認識領域とは、とりわけ芸術だ。そこでは典型的（typisch）な認識、それだけが可能なのである。（ここらあたりでクラカウアーは「タイプ」Typusという言葉を特殊な術語として用いはじめる。）芸術とは、たしかに一方では体系づけや薄めゆく抽象化によって普遍妥当性の仮象を欺瞞的に手に入れているかも知れぬが、しかし、つまるところは、計算不能な魂の基底から流れだすものであり、予感、信念、あれこれほじくりかえす悟性、測り知れず、また意識もされず、あとになって初めてそれで正解だったと正当化される意志、そういったもので芸術はみなぎりあふれているのだ。

さらにもうひとつ、規模の大きな歴史認識という領域にも、こうした「タイプ」が現われてくるとクラカウアーはいう。現実から離れ、出来事と出来事のあいだに非現実の結合線を引き、果てしない多様性を形象的に直観し、大きな輪郭線のなかにそれをまとめ、人間のしてきた限りない範囲の、また矛盾の極みともいえる体験を、感情をこめて追体験することがここでは行なわれるのだから。ここにおいても魂のすべてが共働していなければならないのだという。もちろんクラカウアーのこうした「歴史認識」のイメージは浅薄といえば浅薄であるが、ともかく歴史家のする仕事に価値をおいている点では、ベンヤミンとクラカウアーは軌を一にするようである。前者が最後にたずさわっていたのは「歴史哲学テーゼ」だったし、後者の遺著となったのは『歴史――最後の前の最

後の事がら』だった。こうした生涯の最後までつづく歴史への思い入れのようなものはアドルノにはない。彼の場合絶筆となったのは『美の理論』であり、さらにはベートーヴェン論だった。この点でもアドルノは「タイプ」が微妙に違うのだ。

すべての人間は、芸術や歴史、そして生を、その人固有に認識することになる素質、すなわち〈世界観〉を持つ素質を芽のかたちで所有しているとクラカウアーはいう。ある人が〈個性〉と呼ばれるにふさわしい人間であればあるほど、彼に内在している目標が、その人間の本質全体を揺すぶり動かしている。つまり、〈個性〉ある人間には、〈内在した目標〉というものがある、という。そのタイプ固有の目標、ないし理想というものがあって、そのタイプとしてやれるかぎりのことはやってゆかなければという思いにある彼らには、踏むべき道程はすでに開かれているのだ。そしてクラカウアーは「真の友情の本質は、似た志操の育成というところにあり、そのタイプの認識領域でおたがいに発展していくことをその前提条件とするものである」[39]とまとめる。「生とは絶えざる発展であり、静止とはすなわち阻害であり腐ることである」[40]。――このクラカウアーの〈友情〉観に照らし合わせれば、一九三七年のアドルノの態度はひじょうに明快である。クラカウアーはそのタイプに固有の認識領域での発展をやめたわけだから、アドルノに言わせればそこで必然的に〈友情〉も終わるのだ。

ともあれ、人と人が友人になれるには、彼らの魂の基底層が基本的に似ているということを前提とする。そのような重要な部分では一致しているにしても、好悪やその関心領域という細部にあっては人と人とは微妙に食い違っている。であるがゆえに彼らが発展してゆく方向はまったく同じではない。ベンヤミンのいうように、方陣においてそのものが占める部署部署での発展ということになるわけだが、ベンヤミンの想いからすれば、クラカ

ウアーはこの重要な部分で一致している基底層、タイプに固有の理想を裏切ったということになるのだろう。

しかし、それは一九三七年のこと。一九一七年のクラカウアーは、ひたすら〈友情〉の理論を語り続ける。友人たちとは、彼らのタイプに芽としてある可能性を押し広げることに邁進するものたちのことであり、自分たちタイプの人間がもっとも価値あると思うものを忘却へと移ろいゆく時の流れから救い出し、一日でも長くそれを生き延びさせようと努めるものたちのことなのだ。友の面前以外では、「私」は生活圏における幾千もの瑣事のなかで、自己をバラバラにするよう強いられている。が、そんな「私」も友のもとには、「私」が「私」であるような、「私」が「私」を感じるままの集合した、敷域の広い「自分」として、近づくことができる。友は人間たちへの「私」の関係を心得ており、なぜ「私」がかように行動し、違ったふうには行動しないかを理解してくれる。そうした友の存在は、「私」のやり方（die eigene Art）を確かなものにしてくれる。ひとつの「我」が、もうひとつの「我」によって肯定されるのだ。それゆえ友人たちは、自分に定められた道をどんどんと進む勇気をおたがいに受け取りあう。そう、ただ独りぼっちのもの（der Einsame）のみが、確信なげに揺れるのだ。あるいは、自己を主張しようとする戦いのなかでへとへとに疲弊するのだ。〈友情〉は、真実の〈愛〉と同じように、人を信じ得させてくれる。〈友情〉は不幸なときの逃げ込み場所である。すべての人々から去られても、ひとりの友によって、人は自分の気を取り直すことができる。〈友情〉はまたそれぞれの魂を拡げてもくれる。自分たちのタイプに啓示されている国に二人して歩み入ることで、一人ではとうてい取り出せなかった宝をそこから取り出すことができる。思考も想像力も、どれが自分に、どれが友に属するものなのか、もはやわからなくなる。（まさに星雲状の、集団としての思考である。）友といるときに決定的な思考や行為が生まれるということが人にはしばしば

おこるのだ。しかし、友があるならば、ひとりでいるときも、つねに自分のうちに他人のイメージが棲みついている。こうしてその「存在」は「我」を超えてふくれてゆく。ゆえにまた、〈友情〉は人をより道徳的にする。友人の良心が自分のそれに加味されるのだから。[41]

以上、紹介していて少し気恥ずかしくなるぐらいに〈友情〉の賛歌をうたっているクラカウアーであるが、以下この論文の最後までは、〈友情〉の壊れる時、すなわち、如何にしてそうした〈友情〉が壊れるかを語ってゆく。最後にいたってクラカウアーが〈友情〉の崩壊のことを語らねばならないのも、彼における何か運命的なものを予示しているような気もするが、とにかく、せっかく良き土壌のもとに生え出た作物も、突然の豪雨や旱魃、あるいは腐敗菌にやられるように、せっかく良き前兆のもとに始まった〈友情〉も、高慢（Hochmut）、狷介さ（Unverträglichkeit）、不信（Mißtrauen）という性格によって、あるいは、生い立ちの差による習慣の違いのような些細なことによって壊れてしまうことがよくある、という。さらにはまた、もっとも親密な魂の共生をも破壊してしまうので、できるだけ〈友情〉からは遠ざけておかねばならない羨望（Neid）や嫉妬（Eifersucht）という感情もある。実際、こういった感情が萌す機会には事欠かないのだ。お金、所有権争い、同じ物への執着、同じ人を愛するといった低次元なところで目的が競合してしまうことは、〈友情〉を鈍らせる機縁になる。あるいはまた、もっと高いかたち（?）の嫉妬もある。すなわち、同じ領域の仕事に専念していて、相手がどうも自分より才能に恵まれていると感じるとき、〈友情〉という関係は水をさされてしまうが、この感情こそ、こののちクラカウアーやアドルノ、ベンヤミンたちが、それぞれ自分のなかで戦っていかねばならないものとなる。

だが、〈友情〉を破壊する性格や感情的な契機がなくとも、〈友情〉が崩壊することはあるのだ。〈友情〉も、そ

の絶頂にいたったとき、そこには滅びの芽が蔵されているのである。そのとき、両方のがわに気の向かなさが忍び入ってくる。あまりにももう話し合いすぎて、たがいの井戸の中は、その底が見えるまで空っぽに汲み尽くされている。もはや相手のことは知れ切ってしまったのでファンタジーも働かず、感情もダランと垂れさがったままという、そんな食傷気味の状態がやってくるのだ。ゆえに〈友情〉の保持には「禁猟期」[42]が、ときどき互いに距離を取ることが必要であるとクラカウアーはいう。〈音符だけでなく休符も必要。それは何もしていないというのではないのだ〉というゲーテの言葉を、ここでクラカウアーは引用する。[43]というわけで、友を失いたくなければ、おたがいに絶えざる自己発展（Selbstentwicklung）をつづけていくしかない。自分たちのタイプの可能性をつねに押し拡げてゆくこと、それが〈友情〉という関係の基礎なのだから。たとえひとたび〈友情〉が結ばれても、安心して休むことは、どうやらわれわれ人間には許されていないのだ。

ただ、自らの独立性（Selbständigkeit）が失われるような危機に陥るときだけは、〈友情〉を解くのが道徳的にいっても必要なこととなる。己れたちのタイプ固有の可能性において、片方がずいぶん先まで行っているとき、まだそこまで到っていない相手には手厚い配慮が必要である。精神の成長は暗がりの中でもっとも良く果たされるのだから。自分のうちに組み込まれた生得の傾向（Ansätze）をどこまで展開できるか、それは個々人の問題だ。真の〈友情〉はこの自己展開に資する。であるから、〈友情〉関係にあっては、両者が均衡していることが、受けることと与えることがバランス良くいっていることが望ましい。すでに一方が己れの根本資質の発展させ具合においてある種の終点近くにまでたどりついているときには、遅れているものは一方的に影響を受けることになる。そうなると、彼はルサンチマンにとらわれる。こうした場合は決然として一時暫定的に二人は断交するのが唯一

の救いである。――以上の考察の果てに、クラカウアーは、〈友情〉の本質をこう結論づける。「友情とは、自由で独立した人間たちによる、彼らのタイプ固有の可能性の発展にその基礎を置くところの志操共同体であり、理想共同体である。おたがい自己を失うことなく共に発展してゆくこと、拡大された自己を所有するため、一体へと溶け合うため、しかしながら、切り離されて独りで存立しつづけるために自分を捧げること――これがこの盟約の秘密である」[44]と。この結論を得て、前編は終わるのであるが、最後にクラカウアーはこう書き加える。「さまざまな友情の種類と同様、個々の友人関係の発展経過におけるその典型的局面については、なお特別に語られねばならないだろう」[45]。そして、これが一九二一年に発表された後編「友情についての考察」で述べられることになるのである。

この一九二一年の後編も、看過しがたい内容を具えているので、またざっとパラフレーズしてみよう。まずクラカウアーはいう、「悪を認識することは、いまだその除去を意味しはしないし、善の認識はいまだその実現を意味しない。しかしこうした認識は道を示し、その意欲を活気づけることになるのだ」[46]と。そうなのだ、〈友情〉を認識することは、〈友情〉を成立させることでも、〈友情〉を享受することでもない。しかし……と、どうやらクラカウアーはこの論文を書くこと自体の意味を再確認しているみたいである。ともあれ、前編では〈友情〉の本質について論を展開してきたが、「今回はその時間的経過における個々の特徴ある局面の描写を試みる」[47]と、あらためて後編での意図が確認される。

というわけで、まず〈友情〉の主要な魅力をいうなら、それは〈会話〉にあるとクラカウアーはいう。（このへん、まことにザッハリッヒである。）友人たちならば、ちょっとした言葉だけでも以心伝心できる。ツーといえば

カーというところだろう。さらには時の経過とともに、彼らのあいだだけで通じる一種の隠語（Geheimsprache）のようなものが生じてくる。

しかし、逆にいえば、深く許し合った人間たちだけが〈沈黙〉ができ、沈黙に耐えられるのだ。沈黙が友人のあいだでは価値を持つ。しゃべることが神聖冒涜となるくらいに満ち足りた状態というものがある。そうしたときには、口を閉ざしながら語り合うということが魂と魂のあいだでは行なわれている。が、そうした〈友情〉が生まれ、育まれるきっかけとなるのは、会話であることに変わりはない。この人とは友人になれるだろうかという手さぐり合いが〈会話〉において始まる。一般的なことを話題にしあいながら、根本感情や根本の世界観は一致しているだろうか、おたがいに発展させていきながら志操や理想を共有しあえる条件はととのっているだろうか、つまり自分たちは同じ〈タイプ〉であるかどうか、それは〈会話〉の中で啓示されるのだ。

つづいてクラカウアーは、〈友情〉において〈別離〉のもつ特別な意味を語りはじめる。別離の時間のはたす役割は決してネガティヴなものではない。離れている者の本質は、その人が騒々しく現在しているときより、より純粋に内なる眼の前に現われてくるから。別離こそ互いが同じタイプかどうかがわかる試金石になる。〈友情〉のきっかけになるのは合い会うことであるにしても、〈友情〉を高めるものは別離なのだ。そして、二人のあいだに空間的な隔たりがあるときには、二人を結びつけるものとして〈手紙〉が浮上してくる。そしてこの〈手紙〉においてこそ、はじめて魂から魂への語りかけに成功するということも、よくあることである。〈別離〉は、〈愛〉という関係と〈友情〉という関係においては、そのはたす機能が違うのだ。〈愛〉においての最高の充足は、ともかく一緒にいるときに得られるのにたいし、〈友情〉はその関係の絶頂を、〈個性〉の自己発見、〈個性〉と〈個性〉

のおたがいの成長にもつわけで、そうした成長が〈別離〉の時においてなされることはよくあるからだ。

だが、〈別離〉が〈友情〉にとってプラスに働くばかりとは限らない。長い〈別離〉の後に〈再会〉した友人たちにあっては、本質的な部分に入っていくことが、見知らぬ他人同士の場合より、容易でもあり、困難でもある。容易なのは、友人たちにあってはすでに互いに許し合い、信頼しあった過去を持っているからだ。困難なのは、友人たちの場合はすでにお互いの像を持っているからで、その像が今も現実に即応しているかどうかを、友人たちはまず探り合わねばならないからである。つまり、再会した友人たちが最初に近づいてゆくのは、友人自身よりも友人の像だからだ。そして、こうしたことが、こののち亡命の時をむかえることになるアドルノやクラカウアー、ベンヤミン、ショーレムにおいては、たしかに幾度か生じたのだ。それについては、また述べることもあるだろう。

ここでクラカウアーは前編で述べた〈仲間関係〉、〈同僚関係〉、〈知り合い関係〉を持ち出し、〈友情〉が頽落して前二者の関係に戻ってしまうことはいともたやすく起こることだといいだす。なぜなら、たがいの成長、己れたちのタイプ特有の方向への拡大をはかってゆく時間のはてには、弛みの時が来るものだから。魂がずっとその最高点を持続しつづけることはむつかしい。しかし、真の〈友情〉なら、こうした人間ゆえの限界を許しあう柔軟性に富むものであることも確かなのであるが。

ところで、そのような〈真の友情〉ではなく、ここらあたりからクラカウアーは〈月並みな友情〉mittlere Freundschaftという次元に論点を移しはじめる。われわれは青春のただ中の、その精神にはまだ結滞したところのまったくない二人の関係から、その理想形において〈友情〉を考察してきたが、ここからは〈友情〉の現実態

に降りて行こうと言いはじめるのだ。すなわち、クラカウアーの術語にそって言うなら、〈知り合い関係〉Bekanntschaftと〈友情〉Freundschaftのあいだに千変万化な位置を占める現実の〈月並みな友情〉に考察の対象を移そうとする。前編においては〈友情〉をめぐる裾野から語ったように、このような〈月並みな友情〉といったものにその眼を据えるところが、クラカウアーという個性の特徴的な部分なのだろう。彼自身も、〈月並みさ〉や〈凡庸さ〉の次元から語るところに己れの可能性を見ていたはずであるが、惜しむらくはベンヤミンの場合と違い(後期のベンヤミンにはやはりそうした志向性があったと思う)、凡庸さへの注視が凡庸のままに終わっているきらいがあり、アドルノによる「小市民的低俗さ」への批判が当たってしまうところもあるのだ。

ともあれクラカウアーはここで、山のそばを通ってゆく人の比喩を持ち出す。その人は自分のたどっているその道から見える山の印象で満足しなければならない。山の形状はその人の立脚点次第である。別のがわからは同じ山が違った輪郭で現われる。このように、相手の全体像などというものは、人間には見て取ることは不可能なのだ。であるから、友とは言いつつ、相手の全的理解など不可能なのであり、また、そこから人間界には〈裏切り〉ということも生じてくるのだろう。つまり、〈真の友情〉、〈理想の友情〉、〈この世にはありえない友情〉だけが、相手を全的にわかりあえるのである。しかしこれは、カフカの『審判』において〈完全な無罪〉が伝説のなかにしかありえなかったように、ユートピア的なプログラムである。二人の人間の交際においては、その関係は、おのずと落ち着くところに落ち着いていくものだ。「月並みの友人たちが一緒にいるとき、あるいは、お互いに相手のことを考えるときには、彼らは二人に共通のものを中心に移し、それ以外の余分なものは周縁に押しやるというふうにして自分たちの本質を組み直す。彼らの魂は、彼らがたがいに持っている像に添うように積み直され

るのだ。いやそれどころか、彼ら自身、友人が自分を見ているのと同じ立脚点から、あらゆる省略と交差をともなった同じ輪郭でもって自分のことを見ているのである。ただ理想の友情のなかでだけ、二人は彼らの魂の王国を、そのすべての方向にわたって、隅から隅まで踏破できるのである[48]」。

〈月並みの友情〉にあっては、その関係には移ろいが生じざるをえぬし、またこのレベルの友情にあっては幾人もの友人ということも可能である。が、〈理想の友情〉にあっては、それは、ただひとつの関係である。それというのも、まったく相い似た方向性を持つ同タイプの素質のものたちが出会うことは、まことにまれだからである。だが、この幸運なケースが生じ、真の〈友情〉が成立したとき、彼らは互いのなかにその心情のありったけをこめて没入するので、もはや同じように心からの第二の友情関係に振り向けるべき内的な力はほとんど残っていない。それに、真の友人たちは恋人たちと同様、他人がその結びつきのなかに押し入ってきて、それを破壊することのないよう、油断なく見張っているものだという。

というわけだから、クラカウアーによれば、〈月並みの友情〉というものは、真の〈友情〉へ到る前段階といったものではない。落ち着くところに落ち着くというのが〈月並みな友情〉の特質なのだから。クラカウアーにいわせれば、すでにその青春を過ぎたものたちの〈友情〉は、こうした〈月並みの友情〉である。この意見は、ぼくには少し諾（うべな）いがたいが、クラカウアーにいわせれば、成熟した人間にあっては、すでに自らのタイプということについては諒解済であり、それゆえ、若いものたち同士に見られるような互いの成長し合いや、探り合いながらおたがいの魂の根底に触れる会話などは、もはやその役目を終えてしまっている。すでに彼らはある種の高みに達しており、その結果抑制というものが生じてきている。となれば、もはや魂の奥底を開示し合うということ

も彼らにあってはまれである。すでに社会に地歩を占め、関心の向きも定まり、家族を持つものたちにとって、その本質のすべてをあげての〈友情〉にはなかなか至りえないのである。夢や計画について語り合うことは〈青春の友情〉の大きな部分を占めるものであるが、いまやそうしたものは実際の活動によって押しのけられてしまう。彼らにあっては、すでに生成の時は過ぎ去ってしまっているのだ。

だが青春の時は過ぎていても、〈創作者同士の友情〉の場合はこの限りではないという。全存在の投入によってのみ何かを達成可能な、そんな領域に棲む彼らにあっては、その活動はまさに己れの〈タイプ〉の全面展開をめざしている。そうした彼らにおいては、〈友情〉というものは直接的に彼らの実生活に喰い込んでくるし、その友情関係には永遠に新鮮な息吹が通う。ここでクラカウアーは「芸術家」や「全人」Vollmenschen の名をあげる。そして、ちょっと辟易するのだが、シラーとゲーテのあいだに交わされた手紙にはそのような「創作者同士の高い友情」eine hohe Schaffensfreundschaft が現われているという。[49]

しかし、ここでのクラカウアーはそうした特別な人間たちの〈友情〉へと超出してしまうのではなく、月並みのレベルへともどり、青春の時に結ばれて、熟年にいたるまでつづく〈友情〉には、「祝祭日の友情」Feiertagsfreundschaft と呼べるようなところがあるという。「人々はこの友情のなかに、日常からの、立ち直り、高揚、救済を求め、生活するためにおしつぶしてきたぬくもりへの欲求をそのなかで満たす」。[50] ということなら、この〈友情〉には「小春日和の友情」とでも名づけたほうが似合っている感じだが、ざんねんながら先ほどの〈創作者同士の友情〉は、こうした〈小春日和の友情〉の方向にはむかいがたいのである。というのも、この小春日和の友人たちを離れがたくしているものは〈未来〉ではなく、ともにすごした〈過去〉だからであり、この世が

提供してくれるすべてのものをともに楽しみ、妨げられることなく自由にお喋りしたり、自分たちのタイプ固有の立場について論じあってみたり、いささか無気力かつのんきにだらついてみたり、過去の思い出を交換しあったりすることが、こうした〈小春日和の友情〉の核をなすものだからである。このような「ぬくもり」が許されない〈創作者同士の友情〉は、いきおい苛烈にならざるをえぬのだ。

〈友情〉のすべてを語りつくそうとするクラカウアーは、ここで熟年と青年、あるいは〈年の差がある人間同士の友情〉に話を移す。この〈友情〉が結ばれるためにも、少なくとも部分的であれ、タイプの同一性が必須の条件となる。この〈友情〉の場合も、同じものをめざしている幸福感と、共に成長がおこなわれることに基づいているのだが、今まさに成長せんとする青年は、熟年者のうちに自分の諸計画や、自分の精神的本質の実現態を見る。この関係にあっては青年は、「自分が与えていると思っているときに受け取っており、求めているときに恵んでいる」[51]。彼にはこの関係を見通すことができない。というのも、恥じらいが青年にわざわいし、年上の友人を熟知するようになることを禁じてしまうからだ。

それにたいし年上の友人は、この自分たちの〈友情〉関係を見通している。青年がまだ自分の前にしているところのタイプとしてなすであろう経験を、すでに彼は自分の後にしており、相手が未だ定かならぬ可能性を予感しているところに、彼のほうはその限界と充足をすでに見てしまっている。ゆえに、意識するとしないとにかかわらず、熟年者は教育者となる。ひとりの人間をかたちづくること、すなわち、生成しつつある魂のなかに自分の最上のものをそそぎこむことは、ときとして彼には言いようのない魅力となる。原理を求める青年の永遠の衝迫、世界との、そしてまた、一般性をもつ大きな問題とのひたむきな格闘、よりとらわれることなくものが見え

ること、若さだけに見られるあたたかさと直接性――こうしたものすべてが、これから自己展開をとげようとしている魂にあっては、まるで蜜蜂の群れが飛び立とうとするときのようにワンワン群がり合いながら、まさに己れのタイプに定められた軌道にむかって飛び立とうとしているものだが、これが熟年者に伝わり、彼の精神を保ち、その心情をよみがえらせ、日々の桎梏から彼を解き放ってくれ、忘れかけていた己れの内部の源泉へ、己れ自身の本質の中心へとふたたび立ちもどらせてくれるのだ。青年の成熟には自己制限が、予感を現実的なものへ捧げることが、決然たる行為への献身が必要であるが、熟年者の〈成熟〉のために求められるのは、自己を制限してくる日々の仕事から距離を取りうること、生活上でのあらゆる問題への態度決定をおこなうなかで、なおかつ己れのタイプを純粋に達成させていくということである。こうして彼らの〈友情〉は、たがいにそれぞれ欠けているものを与えてくれる。

しかしこの〈友情〉が完全性へといたることがまれなのは、生徒と先生、弟子と師匠といった他の関係がこの関係の上に重ね書きされることで、この関係自体の理想的な線が、ぼやけさせられてしまうからである。かててくわえて、異なった人生の段階にあるもの同士の理解は、だいたいが困難なものだし、年の隔たりは、前にも述べたように強い羞恥心を生んで、無邪気な接近を許さない。尊敬の気持ちが青年の口をつぐませ、熟年者の優位性が青年をおしつぶすかもしれない。さらに、この〈友情〉にあっては、性的、性愛的な体験のことは口に上せがたいというネックもある。クラカウアーにとって一四歳違いのアドルノとの〈友情〉は、最初はまさにこのカテゴリーに属するものであったわけだが、クラカウアー自身の描いたこうした一般論とは別に、その内実はどうであったのか。

しかし、その前に、もう少しで終わるのでこのクラカウアーの友情論の帰趨を最後まで見とどけておこう。つづいてクラカウアーは〈男と女の友情〉について語る。いかなる関係であれ性衝動が前面に出てくるところでは、感情の深みに根を下ろし、そこではじめて養われる〈友情〉といったふうなものは、たとえそれが時に強く働くことがあっても、たんなる随伴感情としての地位に落ちてしまう。〈友情〉と〈官能的欲求〉を秤にかけた場合、どうしても後者の方にかしいでしまうのが人の常だが、にもかかわらず、官能的欲求の方に一方的にかしいでいかない、そんな男女の関係がいくつかあるという。そのひとつは、若い男と年配の女のあいだの〈友情〉である。世間知においても魂についての知においても、優越した位置にいる年上の女は、生成の渦中にある若い男の混乱を受けとめてくれるのだ。が、そのときの女の方の感情は複雑である。年の違いを意識し、断念せねばならぬことを知っているがゆえ、そうした女は男への自分の愛好のなかにひそんでいる官能性の部分を薄めながら、同時に、そこになにか母性的なものをまじえる。そうすることによって、また彼女自身、新しい存在へと目覚めることになる。「多くの感じられたことは思考となり、多くの意識しなかったことが意識された行動となる。彼女という現存在は、この関係によって比類ない魅力を身にまとうようになる」[52]という文章が最後につづく。

では、〈同年齢の男女の友情〉はどうか。こうした〈友情〉は、女たちが職場や研究室において、純粋にエローティッシュな感情的生というものからは解き放たれたザッハリッヒな生の内実を受け取るようになったことで、ひょっとしたらふえているのかもしれない。が、この種の関係が危うい均衡関係にあることは否めない。クラカウアーは、この友情についてそれ以上述べない。が、これまでのクラカウアーの論じ方にそっていうなら、〈創作者同士でかつ同年齢である男女の友情〉というものも書き加えておくべきかもしれない。たとえばジョルジュ・

サンドとショパンの場合など。そこには少し年長であったサンドのがわからの母性的なものの注ぎ込みや、性愛的に語られるべき面もあったのかもしれないが、創作者同士の友情に収斂しうるものも、また含まれていたのではないか。もちろんこの友情は崩壊するのではあるが、こうした場合、ただ崩壊していくものだけが真を孕みえたのだといいたくなる。

では、ひるがえって、女と女の場合の〈友情〉は可能なのか。この〈友情〉を規定するにあたってクラカウアーは、それに「情緒的友情」Gemütsfreundschaft の名を与え、しかも、これを最初から〈月並みな友情〉のうちにカテゴライズする。ここで二人の友人たちを結びつけているものは情緒的な愛着なのであり、精神的な共同体という面はきわめてうすい。男たち同士の場合であっても前に〈小春日和の友情〉として述べたそれ、すなわち、〈青春のときの友情〉が解かれずに成年にまで持ち越されたものもこの「情緒的友情」なのだという。すなわち、そこにはもはや精神的な養分が欠けているのだ。女性が耳にすれば、さぞむかむかするだろうが、この友情論は一九二〇年代のそれであり、また男が書いたものであるかぎり、当然その限界性はあるわけである。

以上、〈月並みな友情〉の様々なあり方を描いてきたクラカウアーは、最後の二ページで〈友情〉ということが不可能なタイプがあることを述べて、この友情論の全体を終える。前編では〈友情〉の崩壊を語っていたが、後編でも最後に、やはりこのようなことを書き留めずにはおれないのはクラカウアーの癖なのだろうか。ともあれ、クラカウアーは、肉体的、精神的にエローティッシュな性向を持って生まれ、友人よりも愛人の方に生来心が傾く人々にとっては、〈友情〉の成立する余地にとぼしい、という。彼らの精神的欲求は恋愛関係において完全に満たされてしまうのである。この恋愛関係の閉鎖性（Geschlossenheit）にかなうものを彼らは知らないのだ。し

かし、その一方ではまた、恋人との関係よりも友人関係を作るように生来創られた人がいる。そうした人は〈友情〉のなかにより多くの幸福を見いだし、その個性の全体を交歓し合おうとする欲求、タイプ特有の方向を手に手を取りあって突き進もうとする欲求が、彼にあってはすべてを支配している。たとえばニーチェがそのような「友情に生まれついた人」Freundschaftsnatur であるという。[53]

しかし、恋愛も友情も受けつけない「仕事に憑かれた人間」Werkmenschen とでもいうべきタイプがいて、これは特別に注目に値する例だとクラカウアーはいう。このタイプの人は、自分を人々に捧げ、その人々から自分を受け取るといったことをするかわりに、己れを満たすイデーに自らを捧げるのだ。彼の魂はたえまなくそのイデーの造形にかりたてられる。これから創られねばならぬ作品（Werk）が彼を吸いつくす。その作品は彼がもつすべての力を要求するからだ。魂から魂への甘やかな流出のなかにひたりきるため自分の作品から身を引くようなことをするなら、彼はそれを裏切りと感ずるだろう。彼の内なるデーモンが、親密な人間関係を、血と肉をそなえた存在と存在のあいだに介在するあらゆる直接性を、断念するよう命じる。自分のなかで燃えているもの、彼はそれを創造にふり向ける。創造のために生き、創造に身を捧げる。さまざまな欲望も情熱も、己れのすべての過去も、不壊であるべき自らの創造のもとに臣従させてしまう。しかし、彼とても他の人々に憧れを感じ、愛をおぼえる人間であり、そうした思いに身をひたし、束の間なりとわが身をまかせたいと思うが、作品が彼を縛っており、同等のものたちのなかの同等のものとして人間的な踊りの輪に加わるのをそれが妨げることに深く苦しまねばならない。しかし、このタイプの人間が己れのデーモンに去られたとき、そのときの彼はどんな人よりも貧しい。彼の内なる目からは目標が失われ、かつては到達可能だった高みへ羽ばたくことができない、そんな時

は繰り返しやってくる。――ここでクラカウアーが「繰り返し」としているのは、救いなのだろうか、それとも、さらなる悲惨さなのだろうか?――絶望に捕らえられた彼は真逆様に、自分には禁じられていた生活のなかに飛び込んで関係を結び、そうした関係のため己れの魂を犠牲に供する。しかしそれも、作品があらためて彼を奪い取ってくれる暁に、再度それを引きだすつもりで、なのだ。

孤独は彼の運命なのであるが、彼はしばしばそのことを忘れ、人々が自分の愛に同じようなしかたで答えてくれないといっては荒れる。しかし人々のこうした打ち解けない態度も、きわめてもっともなことである。というのも人々はそうした彼が突然嵐のようにその身を捧げてきても、彼が半分しか自分たちには属していないことを感じているし、彼が見えない鎖で縛られているイデーに嫉妬している。そういうわけで人々は、彼には客に示す友情（Gastfreundschaft）しかあたえず、自分たちの魂のなかへの居住権（Heimatsrecht）は認めないであろう。ベートーヴェンとかミケランジェロのような、その内的な規定にしたがって生きねばならなかった男たちのこうした苦悩について、われわれの手には心をうたれる告白が残されている。また、彼らがその苦悩を口にしなかったときにも、われわれはしばしばそれを予感する。――いつかその魂から創造というものが離れれば、おそらくその時はじめて緊張緩和が訪れるだろう。ゴビノーが〔一九一八年に独訳された〕『ルネッサンス』のなかで、仕事の衝迫からやっと解かれた老いたミケランジェロを、前よりも柔和で近づきやすい人間にし、頭に霜を置く年になってはじめて彼に余暇というものを発見させ、それを讃え、愛させているとき、彼はこのあたりの機微をよく見てとっているように思われる。[54]

よりにもよって『人種不平等論』を書いたアンティゼミティスムスのジョゼフ＝アルチュール・ゴビノー（一八一六―八二）の戯曲を引用することでクラカウアーは自らの友情論を閉じるのである。このように、ミケランジェロやベートーヴェンを例として簡単に持ち出してきたり（けれど、ぼくもサンドやショパンのことをあげたのだから大きな事はいえないが）、創造のデーモンなどという言葉を無造作に使うところはトーマス・マンやシュテファン・ツヴァイク流のバナールな感覚であり、三〇年代になってベンヤミンやアドルノが批判するクラカウアーにおける「伝記作家めいたもの」は、なにも亡命の苦境だけがそう仕向けたのではなく、その〈芽〉はすでに彼の作家活動の初期から顔をのぞかせていた感じである。

さらに、そういった平俗さと手をたずさえるように、ここでのクラカウアーは一九世紀的な教養の尻尾をいまだに色濃く引きずっているのを感じるが、そうした辟易させられるところはあえて嚥下しつつ紹介してきたのは、凡庸といえば凡庸なこの友情論は、アドルノとベンヤミンの緊張をはらんだ関係を描くにあたって、あるいはさらに、アドルノという現象自体を考察してゆく上で、彼らのまわりに思想的空気（クリマ）の一翼をになうかたちで実在していた人間による友情論であるため、アドルノとベンヤミンの極めて特異な友情を描くさいの白地図として使えるかもしれないと思えたからである。この論の最後をクラカウアーは、〈友情〉がそもそも不可能な、創造のデーモンにかられた人間ミケランジェロをあげることで終えているわけであるが、もちろんそのスケールをまったく異にするにせよ、アドルノ、ベンヤミン、そしてクラカウアーも、それぞれに己れのデーモンをもつ創作者たちだったのであり、それぞれに「作品」をかかえながら、かつ、同時に〈友情〉を求めたのである。

ベンヤミンとアドルノの『往復書簡』の最後には、ポル・ボウでベンヤミンが自殺した日、スペインへの脱出行の連れであったヘニー・グラント夫人に託したアドルノへの伝言が収録されている。当時はそれをも破棄せざるをえない状況にあったため、全文フランス語で書かれているこれは、後で記憶をたよりに夫人が再現してアドルノのもとに送ったらしい。その伝言はこうである。

> 出口なしの状況のなかで、ぼくにはもうけりをつけるしかほかに道はない。ぼくが生を終えようとしているのは、だれひとりぼくを知るものはいないピレネー山中の小さな村のなかだ。
> どうかぼくの思いをぼくの友人のアドルノに伝え、ぼくが置かれることになった状況を彼に説明してやってほしい。書きたかった手紙はたくさんあるが、それをすべて書くだけの時間が、ぼくには残されていないのだ。[55]

ここに書かれている「ぼくの友人のアドルノ」(mon ami Adorno) という言葉にぼくは震えるものをおぼえる。生涯の終わりにこう書くにいたるまで彼らにあった様々な事を思うと、ここでベンヤミンが使った「友人」という言葉には、千鈞の重みを感じるのだ。しかし、そのような人間的なレベルだけではなく、思想的にはさらに興味深いこの二人の特殊な関係に踏み込んでいって、両者によって共有された星雲状の思考を布置的(konfigurativ)に現出させてゆくまえに、なおしばらくクラカウアーとの〈三体問題〉を見ていかねばならない。

最後にこの友情論自体の作品としてのレベルについて一言しておこう。同じ時代の友情論として、一八八三年生まれのフランスの詩人にしてモラリスト、一九三二年にアカデミー・フランセーズの会員に選ばれたが、対独協力のため大戦後は国外に追放されることになるアベル・ボナールに、名高い『友情論』（一九二九）がある。この両著には男と女の〈友情〉など内容的に重なる部分もあるのだが、ボナールより六年あとに生まれたクラカウアーの友情論は、ボナールのそれより七年も前に出されており、また内容的にも決して遜色があるとは思えない。ただ、いかにもフランスのモラリストの伝統に身をゆだねながら書かれているボナールの『友情論』に比べ、ほとんど世に知られていないこのクラカウアーの友情論のほうには、そのような流麗さがない。それどころか、いかにもドイツ人好みのごつごつした学問的粉飾さえつけられており、さらに、実践的、マニュアル的であるところなども、どこか火急の必要性にかられて書かれた二〇世紀的文書のひとつとして、逆にこの時代の歴史を証言している面もあるように思える。われわれが無意識のうちに行なってきた友情をむすぶという行為を、あらためてマニュアル化してみる必要が、この時のクラカウアーにはあったのだ。そこにはまた、並はずれた友情の生じる予感もあったのだろうか。いずれにせよ、この友情のマニュアル化によって、クラカウアーとアドルノの友情が、いっそうその精妙さを増すことになっただろうことだけは間違いない。

注

論文中の引用に関しては、以下の略記号のもと、そのページ数を示しておく。全集の場合はその巻数もあわせ

で表記している。

Theodor W. Adorno:Gesammelte Schriften Suhrkamp（以下 A.と略記）
Walter Benjamin:Gesammelte Schriften Suhrkamp（以下 B.と略記）
Theodor W. Adorno und Ernst Krenek:Briefwechsel (1974) Suhrkamp（以下 A-K.と略記）
Friedrich Nietzche: Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe in 15 Bänden (1988) dtv/de Gruyter（以下 N.と略記）
Theodor W. Adorno und Walter Bennjamin:Briefwechsel 1928-1940 (1994) Suhrkamp（以下 A-B.と略記）
Siegfried Kracauer:Schriften. Band 5•1 (1990) 5•2 (1990) Suhrkamp Verlag（以下 K.1.,K.2.と略記）

なお野村修氏のものをはじめ邦訳のあるものは参照させていただいたが、一部訳をかえたところもある。記して、お礼とお詫びのかわりにしたい。

（1）A.Ⅳ.S.281
（2）A.Ⅹ.S.284
（3）A.Ⅹ.S.30
（4）A-K.S.148f.
（5）A-K.S.149
（6）A.Ⅺ.S.303
（7）a.a.O.
（8）A.Ⅹ.S.200
（9）A.Ⅳ.S.81f.
（10）N.Ⅲ.S.511
（11）N.Ⅲ.S.14

（12）N.Ⅲ.S.387
（13）N.Ⅲ.S.295
（14）A.Ⅹ.S.218
（15）A-B.S.240
（16）A-B.S.241
（17）a.a.O.
（18）a.a.O.
（19）A-B.S.242
（20）a.a.O.
（21）A-B.S.243
（22）B.Ⅱ•2.S.573ff.
（23）A.Ⅴ.S.301
（24）a.a.O.
（25）A-B.S.248
（26）A-B.S.252
（27）K.1.S.40
（28）K.1.S.41
（29）a.a.O.
（30）a.a.O.
（31）K.1.S.42
（32）a.a.O.
（33）K.1.S.43
（34）K.1.S.44

(35) K.1.S.45
(36) a.a.O.
(37) K.1.S.47
(38) K.1.S.48
(39) K.1.S.49
(40) a.a.O.
(41) K.1.S.51f.
(42) K.1.S.53
(43) a.a.O.
(44) K.1.S.54
(45) a.a.O.
(46) K.2.S.131
(47) a.a.O.
(48) K.2.S.139
(49) K.2.S.142
(50) a.a.O.
(51) K.2.S.143
(52) K.2.S.144
(53) K.2.S.146
(54) K.2.S.146f.
(55) A-B.S.445